

ウォルター・ドゥ・ラ・メア 詩集
『ピーコック パイ』(その1)

野 口 忠 男

騎士

私は騎士が 丘を越え
馬を駆ける音を聞いた
月は冴えわたり
夜は静かだった
彼のかぶとは銀色に輝き
顔は青白かった
それに彼が乗っていた馬は
象牙で出来ていた

ああ、ああ！

アン アン！
さあ！ 急いでおいで！
フライパンの中で
魚が話しているよ
油がにじみ出て
ガラスのように透き通り
口を突出し
「ああ！」とうめき声を上げたよ
おお とても悲しそうな声
「ああ ああ！」
それからじゅうじゅう言って
ぐったりしてしまったよ

疲れたティム

かわいそうな疲れたティム！ 彼にとっては悲しいこと
長く明るい午前中のろのろ歩き
とても疲れて何もできない
終日ぼんやり眺め ふさぎ込む
何も考えない 何も言わない
ろうそく持って寝室へのろのろはい上がる
疲れ過ぎてあくびもでない 疲れ過ぎて眠れない
かわいそうな疲れたティム！ 彼にとっては悲しいこと

ミマ

ジェミマが私の名前
でもああ 別の名前があるの
お父さんはいつも私をメグと呼び
ポプもお母さんもそう呼ぶの
私のお姉さんだけは
私のきれいな髪をねたんで
「ジェミマーミマーミマ！」と
あざけりながら 階段の下から呼ぶの

獵師たち

三人の愉快的紳士たち
赤いコートに身をつつみ
馬にまたがり
寝床まで上がって行った

三人の愉快的紳士たち
朝までぐーぐーいびきをかき
彼らの馬は黄金色の麦を

むしゃむしゃ食べた

三人の愉快的紳士たち
夜明けとともに
ドタドタガタガタ階段降りて
全速力で走って行った

番犬

誰か私のモブサーを見たことある？—
それはかわいい犬なのよ
毛はチャールズ五世と同じ色
歯は海を行く船のよう
しっぽはくるりとたいこ巻き
耳はびんと並んで立っている
そして優しくモブサーと呼ばれると
易しい名前に応えるの

私には我慢できない

私は肉屋さんが我慢できない
そこの肉は耐えられない
一番いやなのはそのお店
通りで一番いやなところ
パン屋さんは暖かく くつ屋さんは暗い
薬屋さんは青白いあかりをともしている
でもああ おがくずみたいな肉屋のお店
あそこが一番いやなところ！

のろま

どうしてずっとかちかち音を立てているの？

どうして丸く白い顔は
本とインクの向こうから私を見つめ
私の恥をあざけるの？
どうしてあのつぐみは「のろま、のろま、のろま」と鳴くの？
どうして青ばえはぶんぶん言うの？
どうして太陽はあんなに静かに輝くの？
そうだとしたも何で私が心配しましょうか？

にわとり

お皿をかちかち鳴らしながら太ったベスは立っていた
すると芝生を横切って
羽ばたき かきわけ あわてふためきやって来た
太ったにわとりややせたにわとり
ドーキング種 スペイン種 コーチン
つやつやしていて小さいチャボ
強風に吹き飛ばされる羽毛のように
にわとりはベスの呼び声聞いてやって来た

誰か

誰かが来てノックした
私の家の小さなドアを
誰かが来てノックした
確かに—確かに—確かに
私は耳を澄した 私はドアを開けた
私は左と右を見渡した
でも動く気配はなかった
静かな暗い夜に
ただ騒がしい甲虫が
壁でガサゴソガサゴソやっていた
ただふくろうの鳴き声が森から聞こえて来た

ただコオロギが露の降りる間鳴いていた
だから誰が戸をたたきに來たのかわからない
まったくまったくわからない

パンとさくらんぼ

「さくらんぼ！ おいしくうれたさくらんぼ！」
年老いた婦人が叫んだ
雪のように真白いエプロンをかけ
横にかごを置いて
そこへ小さな子供たちがやって來た
目を輝かせ ほおを赤らめ
さくらんぼを一袋買うために
パンと一緒に食べるために

かたつむりじいさん

「さあ出ておいで！」とかたつむりのシェルオーバーじいさんが言った
「何ですか？」とみみずが言った
「角のある老いた庭師はぐっすり眠り
太った雄どりのスラッシュは
巣に帰ったよ
露が登る月の光をあびて
きらきら輝いているよ
年老いた虫のサリーが穴からのぞいている
さあ出ておいで！」とシェルオーバーじいさんが言った
「よしわかった！」とみみずが言った

不幸者

不幸な不幸な人生を私は送らなければならない
長い一生の間中

愚かな乳母がその昔
ごつごつしたひざの上に寝かせたので
母さんが爪を鋼のはさみで
ちょきんと切ってくれなかったのも
もしも彼女らが
柳のベットに枕をさせて寝かせてくれたなら
もしも彼女らが指をかんでくれたなら
こんなひどい目に私はあわずにすんだろう

小鳥

大好きな父さんが大きな家を買いました
母さんを迎えるために
母さんは長い羽かざりの付いた帽子をかぶり
青いガウンを引きずってやって来る
バイオリン弾きの御一行や
女や男の召使いたちは
時計が朝を告げるまで踊っていた
陽気な新居披ろうの祝いの席で
お客が皆んな帰ってしまうと
すべてがしんと静まりかえってしまった
暗いつたの中から かわいい小鳥が踊り出た
それは私だった

菓子と白ぶどう酒

年老いたカラウェイ王は
菓子と一杯の白ぶどう酒で夕食を取った
のどの渇きをいやすため
アラス織りの中の小鳥や
広間の獺犬が
とても優しい目をして見つめていた

あるいはまったく見ていなかった
まん中では火がともり
まわりを囲む石は 変わらず気に留めず
物音一つたてなかった
まったく彼だけが
立派なテーブルについて
かんだり飲んだりしていると
夢がだんだんさめてきた
食べ終わってしまった時
うなずきながら言いました
「カラウェイ王のために菓子と白ぶどう酒！」

リオの船

青い海に船出した
リオの船がありました
九十九ひきの猿たちは
皆んな愉快的乗組員
甲板長から船室の給士まで
船尾から調理室まで
彼らがまとうキャラコの布は
ありません—ぴったりするのゆるいのも
帆柱からデッキまで デッキから竜骨まで
船底から横づなまで
きゃあきゃあ叫ぶ連中に
古着一着ありません
それは楽しい光景ではなかった
深い海の強風がとどろき
船首から船尾へ
しっぽを振り振り元気よく走りつつ 帆を巻くのを見ていた時は
ああ それは楽しい光景ではなかった
鏡のように穏やかな海となり

彼らがラム酒の小さな樽のまわりに集って
仕立て屋みたいにしゃがみ込んでいる姿を見ていると！
ああ それは楽しい光景ではなかった
船が陸に着いた時
彼らが皆んな木の実を求め 砂浜を横切り
あわてふためき飛びはねて 去って行くのを見ていると！

ティリイ

年老いたティリイ ターヴェイコムは
すわって縫い物をしていた
ちょうどそこにシダがはえていた
彼女があくびをしようとして
口を大きく開けた時
種がいくらか
ふわふわと彼女ののどに入って行った
それからあなたを一度見る
それからあなたをもう一度見る
かわいそうな年老いたティリイは
あつという間に死にました
でもああ 風が悲しい音をたてて吹く時
かわいそうに老いたティリイが家を恋しがる
ああ 霧の中である声が
ため息まじりにささやく時
老いたティリイ ターヴェイコムが
あたりをさまよっている

ジム ジェイ

ドゥ デイドル ディ ドゥ
かわいそうなジム ジェイは
きのう足がびったり地について動けなくなった

彼は横目で見つめていた
組んだ脚を折り曲げて
風がおさまることなど気にせずに
風見が向きを変えました
日が暮れて行きました—
それでもジムは
さびたピンのようにぴったり地について動かなかった……
私達は7時から12時まで
ひっぱってみました ひっぱって見ましたが
ジムときたら 驚きながら
どうすることも出来なかった
すべては皆んな無駄でした
時計が1時を打った時
ジムは
体を少し動かした
5時半になった時
あなたは彼が
ハンカチを振るのを
わずかに見ることが出来ました
昼となり
私達がとても高い所へ登って行った時
ジムは小さな点に見えました—
こっそり歩いて行きました
明日来てごらんさい
と近所の人は言うのです
彼は何かほしさに泣きながら 通り過ぎていくでしょう
かわいそうなジム ジェイ

T 嬢

とてもおかしい—
ほんとにおかしい—

T嬢が食べるものは皆
T嬢に変わる
オートミールのかゆ りんご
ひき肉 マフィン 羊肉
ジャム 乳製品 寄せもの料理—
それが何でもかまわない
たちまち
これらは彼女の皿から消えて行く
ブッチかあさんも 気むずかし屋のベート氏も
一緒に食べているけれど
小さくて元気がよくて
きちんときれいな
T嬢が 食べるものは皆
T嬢に変わる

戸棚

ちっちゃな ちいさな鍵のある
小さな戸棚を知っている
そこにはあめん棒のびんがある
私の私の私のために

ねえ それには暗い暗い
小さな棚がついている
バンブリーケーキの一皿がある
私の私の私のために

私にはとてもつるつるしたひざの
小柄な太ったおばあちゃんがいる
おばあちゃんが戸棚の番をし
鍵を鍵を鍵を持っている

ねえ 私が
本当にいい子でいる時は
バンプリケーキとあめん棒がもらえる
私の私の私のために

あちこちへ

ラッドゲートの丘を下だり
フリートの丘をのぼり
あちこちへ 東へ西へ
町の通りは人だらけ
テンプル パーの英国の王様でさえ
休暇のために
フリートの丘を下だり
ラッドゲートへ向けて馬り乗り
駆け回る

床屋さん

金髪 黒い髪
赤毛の髪 茶色の髪
小さく束ねた
かわいい巻き毛に蝶結び
澄んだ目の上に髪がたれる
耳のまわりの髪のを
チョッキンチョッキン切るはさみ
床さんの大きなはさみ
鏡に映るわたしたち
通りを行く人の足音
上へ下へ あちこちへ
細身の刃が合わさる
香りの良いペーラムあるいはペアズ グリース

4 ペンス銀貨を支払い—
それから外は陽がキラキラ輝いている
晴れた青い空のもと

かくれんぼ

かくれんぼしょう
森の木陰で と風が言う
かくれんぼしょう
ハシバミの芽に 月が言う
かくれんぼしょう
星から星へ 雲が言う
かくれんぼしょう
港の砂州で 波が言う
かくれんぼしょう
自分に言う すると
目覚めの夢から
眠りの夢へ落ちて行く

大地

大地は銀を黒ずませる
大地は鉄を錆させる
でも大地は金やルビーを
錆させることは出来ない
大地はか細い骨を
冷たい胸で白くする
でも大地はルビーや金と同様に
私の夢を変えられない
大地と太陽は
私を日焼けさせ 足を疲れさせる
でも私が考えていること これから考えること

もちろん どちらも知りません

それから

20年 40年 60年 80年

100年前に

一晩中明るく輝くカンテラさげて

見張りがあちらこちらへとぼとぼと歩いていた
すると床に気持よく寝ていた少年たちは

夢から覚めると聞き耳立てた—

「時刻は夜中の2時

星が明るく輝いている！」

あるいは煙突の先を横ぎって

北東の強風が金切声を上げる時
かすかな震え声を上げた

「3時！ 雨やあられの嵐！」

窓

ブラインドの後ろに座って

人が行くのを一人が通り過ぎるのを見ている
でも誰一人

私の小さな目で見つめているのに気づかない

人には私の小さな部屋が見えない

日をさえぎられすっかり黄色くなっている

人には私がここにいるのさえわからない

私がいなくなってもわからない

かわいそうなヘンリー

グラスにどろどろした

葉が入っている
かわいそうなヘンリーは
おずおずと手をのぼす
彼の丸いほおが
ろうそくの明かりで青ざめていた
そのにおいをかぐために
それを見るために

人差し指と親指で
彼の小さな鼻をつまみ
ごくごく 息止めて
葉が入る
今度ヘンリーは顔をしかめる
でも来週に 元気で明るくつややかな
あのほおを見てごらん！

満月

ある晩ディックがぐっすり眠っていると
彼の眠い目の中に
大きな静かな光が流れ込んで来た
静かな空から
それはきれいな月の光だった
彼がぼんやり頭を上げた時
銀色の光の波が窓ガラスを満たし
彼の床に流れて来た
そこで しばらく二人は互に見つめあった—
ディックと神神しい月は—
すると月はゆっくり空に昇って行き
姿は消えて 見えなくなった

本の虫

「疲れた—ああ 読書にあきた」とジャックが言った
「緑の草原や
木陰のすみれが
冷たい花びらを揺らす森に行きたい
農夫が畑を
大またで歩くのが見たい
ざわめく海が波を
岸に打ちつける音が聞きたい
かもめが岩に止まっている仲間のところへ
旋回しながら飛んで行くのを見たい
あるいは息づかいの荒い牛が 牛舎の中で
門戸の上に首のせて うとうと夢見ているところ
何かが消えてしまった そして本を見ても
それを取り戻せない
緑の草原へまた行きたい
読書にあきた」とジャックは言った

四重奏

トムは喜びのために歌った ネットは喜びのために歌った 年上のサムは喜びのために歌った
私たち4人の少年たちは 大きな音を立てて笛を吹いた まるで1人の少年が吹くように
地主と一緒にすわっていた婦人たち—彼女らのほおが涙で濡れた
私たちが四重奏をした時 私たちの声を聞いて

トムは低く笛を吹き ネットは低く笛を吹き 年上のサムは低く笛を吹いた
悲しい調べとなって私たちの音楽が流れた
地主と一緒にすわっていた婦人たちが 決して忘れないと言った

彼女たちの目は喜びの歓声を上げていた
私たちが四重奏をした時に

TRANSLATIONS

Translations of William Stafford's 19 Poems

Yorifumi YAGUCHI

Walter de la Mare: *Peacock Pie*

Tadao NOGUCHI

The Letters of C. L. Dodgson
to the House of Macmillan
(3)

Kumiko TAIRA